

小西萬知子講演会

「さわる絵本を作って40年 なぜ見えない子にも絵本なのか」

<小西萬知子プロフィール>

1943年大阪生まれ。大阪樟蔭女子大学英米文学科卒。吹田市在住。

1966年から大阪市立中央図書館に勤務、大阪市立生野・福島図書館の館長を経て、

2003年大阪市立中央図書館利用サービス課長代理で定年退職

1977年から視覚障がい児のための絵本「さわる絵本」の製作及び普及活動をはじめ。

1978-2004 日本図書館協会障害者サービス委員

1991-1993 日本図書館協会評議員

1993-1996 日本図書館研究会理事

2010・2011 「子どもの読書推進活動支援員」(大阪府立中央図書館)

- ・大阪市立中央図書館にて、ボランティアグループさわる絵本の会「つみき」主宰。さわる絵本製作ボランティア養成講座や、講演会を図書館・大学等で実施。1982年「さわる絵本連絡協議会・大阪」を結成。
- ・非常勤講師として「図書館児童サービス論」を堺女子短期大学・成蹊女子短期大学・大阪学院大学・桃山学院大学等で講義担当。桃山学院大学図書館司書養成講習で「児童サービス論」を担当。
- ・2003年から「おはなしグループ綿の花」を結成、大阪府中央児童相談所（現大阪府立こども相談センター2017年1月まで）・聖家族の家託児園、幼稚園・四恩学園乳児院、四恩学園玉水園・国立病院機構大阪医療センター小児病棟・吹田市立吹田市民病院・愛仁会高槻リハビリテーション病院小児病棟・箕面支援学校・茨木支援学校、大阪発達総合療育センター、なかよしすみれ保育園、エキスポシティ内つたや等で、定期的に絵本の読みきかせやお話し会を実施、絵本の勉強会も継続実施

・子どもに絵本を届ける活動及びさわる絵本製作ボランティア養成講座

大阪市・吹田市・茨木市・門真市・堺市・泉南市・高槻市・鳴門市・高松市等の図書館等で講座を実施

翻訳

「身体障害者に対する公共図書館サービス」のための提言 ジェラルド・ヤホーダ著『としよかんサービスこれからの課題』日本図書館協会 1984 刊分担執筆

「障害者関係資料」 『障害者サービス入門』日本図書館協会 1994 刊

「図書館利用が困難な子どもへのサービス」『子どもの権利と読む自由』日本図書館協会 1994 刊, 「障害のある子どもへのサービス」『障害者サービス (図書館員選書)』日本図書館協会 1997 刊, 論文

「さわる絵本—大阪での試み」 雑誌『図書館界』2001.11 刊 通巻 301 号,

<講話>

今、お話がありましたように、JBBY っていうとても大きな世界的な組織の中で、しかも東京で話をさせていただけるなんていうことで、すごくありがたいなと。もう 40 年も前からやっておりますけれども、図書館関係の大会では何回か全国組織でしゃべったこともあるんですが、東京で、さわる絵本のことについて話せるなんて、本当に夢のような感じで、きょうはありがたいなと思っております。それでは始めます。

今ご紹介いただきました小西萬知子です。私はもともと図書館員で、37 年間、図書館に勤めていました。私が勤めたときには、大阪市の松岡享子さんがいらっしゃったから、子どもの本へのサービスに目覚めまして、それまでは何にも知らなかった私が、子どもの本にのめり込んでいきました。それから、その頃の図書館は、「どこでも、誰でも、いつでも図書館へ」っていうような、図書館を全国に広める運動が始まっていました。そして、家庭文庫が、石井桃子さんのあの本（「子どもの図書館」岩波書店 1965）が出て以来、すごく増えてたんですね。私自身は、子どもの本に目覚めて、ストーリーテリングやいろいろなお話のことなんか勉強したりしてたんですけども、そのうちにさわる絵本に出会ったっていうことなんですね。

まず最初に、皆さんにお伺いしたいんですけども、図書館の関係、図書館の職員、司書っていうような方はいらっしゃいますでしょうか、ここに。図書館関係の。ありがたい。少し来ていただいて。きょうは攪上さんに、

「どっちかいうたら、図書館の人に叱咤激励するような話」って言われておりましたので、図書館の人が 1 人もおらんところでそんなこと言うてもしょうがないなと思ってたんですけれども。それじゃあ、もともとの話のつもりでお話しさせていただきたいと思います。

私は、生野図書館と福島図書館で、小さな館を自分でつくって、そこで運営するっていうような機会がありましたんですね。生野の図書館は、在日のかたがたのまん真ん中にいたんですね。今は全国的に有名なハングルの本を集めている図書館っていうことで、全国大会でも発表するようなことがありましたけれども、私が行きましたときから始めたのですね。それでハングルの本。やはり、日本に住んでいると、在日の子どもは、自分が本当の意味で疎外されたもの、自分がきらっていた朝鮮人というのが自分だったっていうようなことが分かって、とても衝撃を受けたっていうようなことが、「歌舞伎町ちんじゃら行進曲」(成美子 徳間書店 1990)という本に書いておられたように、自分の生まれたことに対する自信と誇りっていうものを持ってもらうためには、生野の子どもたちに、本当の意味での韓国、朝鮮の事情を知ってもらうという意味で、北の本も南の本も、まず日本語から集めて、それからハングルの本も集めていくようにしました。それから福島の図書館に、大阪市の 23 (地域図書館) のうちの最後にできた図書館ですが、誕生したときには、さわる絵本と、それからてんやく絵本を、書架に並べるっていうようなことをしました。またそのことについて後で申し上げます。2003 年に定年退職しましたので、結局 37 年、大阪市にお世話になったんです。ちょうど 40 年前、

今年の年が分かってしまいますけれども、30 歳のときに、東京で、私は品川の図書館で、むつき会がお作りになったさわる絵本に出会ったんですね。その前から、日本図書館協会の中で、図書館は図書館に来れる人、図書館にある資料だけが使える人だけでなく、図書館利用に困難な人へのサービスに目を向けなあかんっていうようなことがいわれておりました。私も日本図書館協会の、障害者サービス委員会の関西の委員を既にしておりましたので、そのときに初めてさわる絵本っていうのを知ったんですね。大阪に、むつき会のさわる絵本を持って帰りましたら、未熟児網膜症の親の会の方からオファーがありまして、見せたんですね。そしたら、とっても子どもが喜んだ。東京から、むつき会からいくらでも取り寄せるよって私が言いましたのに、そんな辛気臭いことしてられへん。私らで作ろうっていうことになりました。図書館員と、家庭文庫をしている者と、そのお母さんがたと一緒に、つみきの会っていうのをつくりました。それが 1976 年なんです。随分昔ですが。

それから、国際障害者年ということもあり、あちこちの図書館で、さわる絵本を作る講座を私が開きまして、12 ほどグループができましたので、さわる絵本連絡協議会大阪っていうのをつくりました。今、さわ連大阪っていうてますけど。そんなんをつくりまして、アフターケアですね。どんな本を選んだらいいか、それから、この本を作るにはどんなところをどうしたらいいかっていうようなことが、お互いに意見交換ができるような会。それから、さわる絵本のことをもっと知ってもらってという普及活動ですね。そういうふうなこと。それから、さわる絵本を視覚障害のある子のところへ届けようっていう、そういうふうなことを大きな柱にして、さわ連大阪を始めました。当時は 23 グループぐらいあって、各グループが 100 人ぐらいっていうのがあったんですよ。でも、今はまた始めたときと同じように、12 グループになってしまいましたけれども。でも、その中では、その頃からずっと続けてくれているグループがありますので。私と同じようにみんな年は取りましたけれども、さわる絵本に対する技術的なこと、それから信念みたいなこと、そういうふうなことは、ずっと私よりも、もっとしっかりと持ったださっている方が、そのグループの中ではいらっしゃいます。私がこんなとこでしゃべるっていうのは、もともと図書館員で、あちこちで、図書館の児童サービスの先生なんかもしておりましたので、そんなんでも私のほうへ回ってきてるんだらうなあとと思いながら、また話させていただけます。途中 23 にもなりました。その頃は、本当にたくさんの絵本ができました。それらはほとんど、地域の図書館か、大阪市の市立の図書館に寄贈しました。その頃、大体 20 年ぐらいたった頃に、私も一遍さわる絵本のことをまとめようと思って、『図書館界』(Vol.53 No.4) という雑誌にまとめて出しています。後でちょっと見てもらおうかと思いますが、今でもインターネットで小西萬知子って引いていただいたら、この、「さわる絵本、大阪での試み」っていうのが読むことができますので、成り立ちとかそういうふうな詳しいことはここに書いておりますので、きょうはもう省こうと思っております。

一番最初に私がむつき会の絵本に出会って、それから、むつき会の代表の加藤さんに大阪に来ていただいて、さわる絵本のことを教えていただき、それから、未熟児網膜症の親の会のお母さんがたと、その子どもたちと一緒に、さわる絵本を作ってきたということですね。大阪風のものになっていったっていうようないきさつを、ここに詳しく書いておりますので、もし興味がおありでしたら、またこれも見ていただいたらいいかなと思っております。一番最初に、むつき会よりも初めになさったのが、矢部さんというお母さんですよ。矢部さんの、実

際、お母さんに絵本を読んでもらって育った次男のヒロキくんだったっけかな、が大きくなりまして、福島の図書館のときに来てくれたんです。また後で話しますけれども。とても稀有な出会いがあったんです。

何はともあれ、さわ連が 12 グループで始まりまして、それ以来、大阪市立の盲学校、今は市立視覚特別支援学校っていうふうに名前が変わりましたが、そこへは 1983 年からさわる絵本を持参しまして、読み聞かせをしております。ここは約 9 年間ぐらいしてました。それからその後、1993 年からは、大阪府立の視覚支援学校へ各学期に 1 回、それぞれグループから作りました絵本を持参しまして、生徒たちと一緒に午後の 1 時間の授業を、先生も交えて、一緒にさわる絵本を読んでいます。考えたら 22 年も子どもたちと一緒に読んできたんだなあ、今回思いました。

それから、普及のためにさわ連大阪では、きょうも別の部屋で展示をしておりますように、それぞれが作りました絵本の展示をして、さわる絵本を知っていただくようなこともしています。それから、さわ連が 25 年になったときに、ちょうど社会福祉賞として 40 万円ほどいただいたので、大阪だけじゃなくって、もっとよそでも、さわる絵本を紹介しようということで、私がさわる絵本を作ることを指導しておりました香川県とか徳島へ、さわる絵本をキャラバンとして持っていきました。その他に、奈良県立も行きましたけれども。そういうふうなこともしています。

さっき言っていましたように、私は 2003 年に退職しましてから、いわゆる、さわる絵本のことは、図書館の仕事が忙しくて手を抜いておりましたけれども、辞める 2 年前から、もう一度つみきを立て直して、それから、大阪市立図書館のボランティアとして、さわる絵本の会つみきを、しております。その他に、図書館の障害者サービスの一つとして、現役時代にはできなかった、病院に入院している子への本の読み聞かせとか、施設にいてる子とか、あるいはその他、図書館利用が困難な、絵本を読んでもらいにくい子どもたちのところに、絵本を読んでもくれる人を育てるっていうことをやってきておまして、それが『綿の花』っていうんですけれども。

『綿の花』は今 40 名ほどおまして、毎週月曜日は、午前は大阪の医療センター、午後は吹田市立病院へ、施設では四つほどのところで、毎月 2 回ずつ。最近では高槻のリハビリテーション病院へも、読み聞かせに月に 2 回ほど行ったり。そういうふうなことを、私自身もボランティアとして活動しています。

さて、まず、きょうの題ですね。さわる絵本を作って 40 年。なぜ見えない子にも絵本なのかっていうことで

すね。私は、今も言いましたように図書館員ですので、あくまでも図書館員としての感覚で何事も考えているなあということが、皆さんがたにもお分かりになるとおもいますけれども、そんなつもりで聞いてください。

子どもは絵本が好きです。そうですね。図書館に来る子ども、大抵、好きです。絵本は子どもが最初に出会う本です。本は、私は図書館員ですからいつも言うんですけども、過去の遺産ですよね。人間の知恵。そういうふうなもの。可能性、それから知識をもたらしてくれます。絵本を読んでもらうときに楽しかったら、その子はたくさん見つけたほど、本好きの子になってくれるだろうと信じております。だから、その子が絵本を読んでもらう時間に、本をできるだけ楽しんでほしい。それを届けたいというのが、私の一番の望みなんです。

最近、こういうふうな本が出ましたよね。『読み聞かせは心の脳に届く』っていう。もうお読みになった方ありますか？読んでない？これは、どうして子どもは同じ本を、読んでと言って持ってくるんだろうという、脳科学の先生が、自分の息子がなんでそんなことするんだろうということで、絵本を読んでもらうときに、どの脳の分野が活動してるかっていうのを研究なさったんですね。張りきって、知識とか言語分野が動くやろうと思っていたのに、全然、動かなかったんですって。がっかりしてしまっただけでも、でも、どこか動いてるやろうということでよく調べたら、感情ですね。言語野と違う反対側のところ。感情を左右するような分野のところ、非常に青くなってたそうなんです。それで、ああ、そうなのかって分かったと書いてあります。楽しいとか、悲しいとか、悔しいとか、怖いとか。人間が動物である一番最初に大事な感情を持つことですよね。それを表現すること。感情を育てるっていうその分野に、非常に働いているということなんです。本読んでもらったとき。だからこの方は、心の脳を育ててるんだなって。大事ですよね。うれしいときにうれしいって思える。美しいものを美しいと感じる。そういうふうな心を育ててるんだよって。それでブックスタートで私たちが絵本を読んだときに、赤ちゃんがなぜあんなに喜んでくれるんだろうっていうようなことも、とても納得がいくような気がしました。もし、お読みになってなかったら読んでみてください。『読み聞かせは心の脳に届く』、泰羅雅登さん。くもん出版から出てます。

絵本というものは、まず、読んでもらうもんなんです。読む人の気持ちとか、心とか、子どもに対する愛情とか、あるいはその人が持っていた、それまでの人生の経験したものが、その人の声、まなざしと共に子どもに流れていくっていうのがよく分かります。というのも、読む人によって、同じ絵本を読んでも全然違いますよ

ね。私たちが綿の花で絵本を勉強するときに、グループ読みってということするんですね。同じ絵本を、5人ぐらい読んでもらうんですね。そうすると全然感じが違うんですね。この本はあんまり好きやなかったのってこういう本が、「ええ！こんなに面白いんや」っていうふうなことが分かります。それは、読み手がその本をどれだけ、どんなふうに思ってるかっていうことによって変わってくるんだと思うんですね。それから、その人が持っている人生観が、絵本というものは絵や文字だけじゃなくって、その他いろんなところで深読みすることができますよね。何度読んででもまた違う感動があったりと、絵本を読むことによって、また違った感じ。子どもは、大人よりもしっかり絵を読んでますよね。そんなふうに絵本を読んでもらうっていうのは、子どもの心に、読んでくれる人の肌のぬくもりやら、良いものが、温かい心、あるいは深い愛情が流れ込むんですよね。この3歳ぐらいまで、脳が3倍ぐらいに重くなるの時期は、なんぼでも吸収する時期ですよ。この時期に、できるだけ良い人間に接して、絵本をいっぱい読んでもらうということが、その子どもが良い人間に、良い人間っておかしいですけど、明日を楽しみ、大きくなることを喜びを持って迎えられような子どもに育てていくんだと思いますね。

絵本とはっていうのは、次に言おうかなと思ってたんですけど、まず知識ですね。与えますし、想像力を支えてくれます。絵本の時代っていうのは、子どもは、絵で最初ものを考えてるっていわれてますから、外国の話や昔話など、自分が接することのできないもの、見ることのできないものは、やはり、絵本でそのお話を支えてもらうからこそ分かるわけですよ。ですが、今言ったように、この頃は、遊びの一つとして、絵本を読んでもらってほしいと思うんですね。字を覚えさせるためではないですよ。このときに、先ほど言いましたように、絵本を読んでもらうということは、その子はひたすら感情のほうの脳を発達させる、育ててるんだっていうことを思えば、文字を覚えさせるということは全然関係ないわけですね。文字を覚えるほうの分野はお留守なんですよ。だから、お母さんはよく、この文字のたくさんある本を買いなさいとか、言うてはる、本屋さんでそんな場合に巡り合いますけれども、そうじゃないんですよ。まず遊びの一つなんですよ。読んでもらったときの楽しみの量が多いほど、本への信頼が高まります。また、読んでくれる人がないと、子どもは本を知らないで大きくなってしまうことですね。だから、赤ちゃんから絵本読みましようっていうのが、1990年ですかね、英国で始まったブックスタート。これも、初めはみんなどうかなと思ってましたけれども、本当に赤ちゃんが絵本を楽しむん

です。おばあちゃんが連れてきてくれたとき、「あきません、この子は絵本なんか聞きません」って言うてるそばで絵本を見せたら、両手両足を本当に踏ん張って喜んでくれる姿を見て、「いやあ、この子、絵本聞くんだけ」って言うようなおばあちゃんとかお父さんに会うことは何度もありますよね。

そんなふうに、さっきも言ったように、赤ちゃんから、感情ですよ。楽しいもの、それから美しいもの、そんなものにちゃんと反応するようにできてるんですね。これを読んでもらうときに、一つのメッセージとして、絵本を文字とかそういうふうなのを覚えさせるもんじゃなくって、親子のコミュニケーションの一つとして使ってくださいと。お母さんが子どもを育てるのに、どう言ったらいいか。あばばば、うぶぶぶしかよう言わんし、この子泣いてばかりやしって言うようなときに、本があれば、本を見せることによって、子どもと絵本を通してお話し合いができるって言うようなことも含めて、ブックスタートはもう10年以上たちますけれども、今もほとんどの地方自治体で、毎年1冊、ゼロ歳児検査のときにあげてますよね。大阪市でもそうです。

それで、このブックスタートのときに、私が出会ったことがあるんです。ちょうど私が退職する前の年に、大阪市がブックスタートすることになって。辞めた年にちょうど、ブックスタートの本が配られたんです。あるとき、ライトハウスの職員の方から、「見えないお母さんがいて、絵本をもらったんだけど、読めないから点字打ってって頼まれたんです」って言うんですね。私がお母さんと知り合いだったもんだから、「え、さわる絵本もらえへんかったの？」って言ったです。彼女は読むことができないから、点字を付けてもらって読んだんですけど、彼女はまた点字があんまり上手に読めなくて、子どもとうまいこと読まれへんって言うたので、私は彼女のところにさわる絵本を届けて、それから、いろいろと大阪市の図書館から借りてもらうようなことをしたんです。担当者に聞きましたら、お母さんが目が見えないって言うようなことは、なかなかつかめないって言うんですね。保健所も、その周りの図書館も、さわる絵本のことを知らないから、さわる絵本の担当者に言えば、彼女用に作るって言うことだって、私たちボランティアがいるんですから、できたのって言うようなことがありますね。そんなふうに、まだ、ブックスタートでさわる絵本が、見えないお母さんに届けられるべきだっていうようなことも、なかなか。今でも多分、どこの図書館でもそんなことはなっていないと思いますが、大阪市の場合は、それ以来、配る本については1冊だけはさわる絵本にして準備しようとしてるんですが、なかなか要求はないということですね。

障害のある子どもにも絵本。なぜ、見えない子に対しても絵本なのかっていうと、これもだいぶ昔に出た本ですけれども、この言葉を皆さんに紹介したいと思います。トードス・ウィリアセーターさんが書かれた『本は友達』っていう本の中での言葉です。『障害を持つ子というと、私たちは何か特別な子どものように考えがちです。しかし、障害を持つ子どもは何よりもまず、当たり前の人の子どものなんです』。当たり前の人の子どものなんです。『そして、全ての子どもが本を必要としています、誰にもまして必要なのは、障害を持つ子どもたちなのです』。この言葉は、本当に私たちみんなが心すべき言葉だなと思います。

それをまた実際に、私たちにもっとはっきり分かせてくれたのが、『クシュラの奇跡』っていう、この本も随分、古いです。『クシュラの奇跡』知らない人。知ってる人言おうかな。知らない人、手挙げるの恥ずかしいもん。知ってる人。やっぱりね。これは朝日新聞の天声人語にも出まして。私たち図書館員は、本当に衝撃を受け、なるほど、これだっていうふうに思ったんですね。何かというと、とても知的にも体力的にも成長が見込まれないような子ども、クシュラが、『140冊の絵本との日々』って副題ありますように、おばあさんが、ドロシー・バトラーさんっていう方が、子どもの本の研究家でありましたので、娘に、このクシュラのしんどいときにも、いつも絵本を読むように進めていたんですね。そしたらクシュラは、非常に困難な状態にありましたけれども、それなりに成長して、そして、絵本の中に慰めを見つけたり、勇気をもらったり、お友達を得たりしていきっていく。そのことが、とてもよく分かるように書いてあります。もし、これも読んでおられなかったら、ぜひお読みになるようにお勧めしたいと思います。

こういうことは、障害に応じた資料ですね。一人一人にあった読み聞かせをしてもらったら、それがどんな困難な状態にある子どもでも、その子なりの成長をしていくっていうことですね。だから、そのことが、一人一人にあった読み聞かせ、その障害に応じた本を用意して置く。それは、図書館としてすべきことじゃないかなと私は思います。今まで、視覚障害の方にいろんなボランティアの方が手を差し伸べてきましたけれども、その子のためだけにしていくので、それが社会的にあまり力になれなかったと思うんですね。さわる絵本を作るのはとても大変です。1冊作るのに1年かかってたら、3年もしたら子どもはすっかり大きくなってしまふ。子どもの時代はとても短い。だから、1冊作ったら、他の子どもも、他のお母さんも読めるようにしたいっていうのが、私の初めからの希望だったんですね。

それで、さっきも話出ましたけれども、岩田美津子さんが、子どもを連れて児童室で職員に絵本を読んでもらってるんですね。かっちゃんっていう子が。1時間ほど読んでもらって帰っていったんですけど、そのかっちゃんが小学校に上がるようになった頃に、岩田さんご夫婦は、お二人とも視覚障害なので、家の中で文字の活躍する場がなかったんですね。だから、幼稚園って、もう既にほとんどの子がまずは読めるようになっているのに、うちの子はどないしようというふうに相談を受けたんですけども。それから、福音館の『こどものとも』を毎月、点訳のできる方をお願いして点字を打っていただいて、彼女のところへ届けたんですね。で、彼女が点字の上をなぞる。その下に墨字が書いてあるということで、字書いてあるっていうことも子どもに言いながら、そんなふうにして読んでいって、文字を教えるっていう最初の困難を、彼女が乗り切ってくれたんですけども。そのときに、私が最初に岩田さんをお願いしたのが、「岩田さんのためだけにこれだけのことを、毎月、毎月この本を点訳してもらおうって、とっても大変なんやから、あなたが落ち着いたら他の子にも、絶対、貸してあげてね」というふうをお願いしたんです、私も。厚かましく。そうしたら彼女は、それをそのまま岩田文庫にしてくれて、今はふれあい文庫になって全国的に貸し出しをしてくれているんですけども。

そんなふうに、障害に応じた資料、一人一人にあった読み聞かせ、そういうふうなことができるのが図書館。そこに、図書館がいろんな本を、障害に応じた本を置いておくべきだと、私は思います。でも、実際、私が図書館に勤めておりましたときは、1日に1000人の貸し出しをしたら夕方には手が痛くなるし、いつもにここにこ仮面かぶって、「こんにちは」、「いらっしゃい」とかにここにこ言うんですよって職員と言ってるんですけど、3時頃になってきたら顔がこわばってきて、くたびれ果てて、大阪市の図書館って行列のないときがないですよ。大阪市の中央図書館が、平成8年、新館開けましたら、土曜日、日曜日いうたら、1万冊の本が返ってくるんです。で、1万冊以上の本が借り出されるんですね。それをまた明日までに書架にならばなあかんわけですよ。そんなんで、何しろ図書館は人が足りない。でも、役所の人は誰もそんなことは思ってくれなくて、図書館は暇でいつも本読んどるんやろうと思っはるので、なかなか図書館が、図書館に来る人に対応するだけで精いっぱい、図書館の利用に困難な人へのサービスっていうのは、どうしても二の次、三の次になってしまっています。

大阪市は、橋下さんになってからすごく財政危機に立っておるということで、資料費だけは確保しております

けれども、障害者サービス専任の係長はおらんようになりましたし、いろんな意味で、あまり利用が目立って見込まれないところっていうのは、どんどん縮小させられてしまうんですよね。でも、大事なのがそういうことなんですよね。図書館がしなくっちゃ。お母さんや、周りの先生がたはとても手が回らないんですよね。それで、図書館ではそういうふうなものを置くべきだということで、さわる絵本は今、大阪市の図書館には全て置いてありますし、大阪市の中央図書館にはもう100冊以上あります。図書館間の貸し出しは無料でできますし、図書館から借りたものを地域の利用者に貸し出すことはできますので、大阪市の図書館をご利用いただいている、広島とか、岡山とか、結構、使っていただいておりますので、大阪市の図書館からさわる絵本借りてくれっていうふうに、地域の図書館にお申し出になると、障害のある方にしか貸し出しはできませんけれども、利用できますので、どうぞ使ってください。

次に、さわる絵本のことをご紹介しようと思います。私が作っておりますさわる絵本は、全て市販されている、健常、晴眼の子どもたちが必ず読んでもらうような本を、まず、さわる絵本にしよう。さわる絵本からもうちょっと大きくなって、自分で点字が読めるようになったらてんやぐ絵本とか、そういうふうなものを、また使っていただいたらいいということで、赤ちゃんのときに読んでもらう絵本から、さわる絵本をずっと作ってきています。

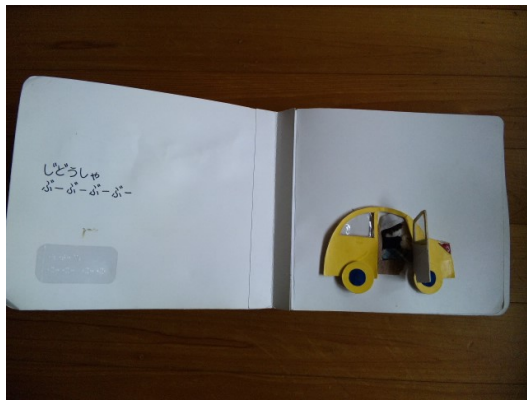
だけど、実際に使ってくれる子はすぐ大きくなりますので、2年も3年もすると、もう物語のほうがいいって言われて、今も困ってるんですけども。日本の昔話とか、世界の昔話とかの本も作らないといけないんですけど。なかなか手が回ってないっていうところですが。まず、なぜ市販の本を、さわる絵本にするかっていうことなんです。それは、見えない子が、その子自身が絵本を楽しむっていうこと、あるいは分かるっていうことはとても大事ではありますが、岩田美津子さんが言ったことがあるんですけども、世の中に出たときに、自分が常識だと思っていたことが、世の中では常識でないっていうことに突き当たるということがいろいろあります。自分は見えないだけなのに、見えないからこれもできへんやろう、あれもできへんのやろうというようなこと、勝手に皆さん斟酌、優しさでしてくださるんですけども、それが私にとってはともつらいです。あるとき、子どもの運動会かなんか、誕生会かなんかをするとき、「岩田君のお母さん、何もせんでええねんって言うてたで」って子どもに言われたそうなんです。で、彼女は勇気を出して、「どんなことをするんですか」って。

「私が何かできることがあるんですか。ありませんか」って聞いたんですって。そしたら、おにぎりなんかも作ってパーティーを開くということだったそうなので、「私、おにぎりならできるから」って言って、その会のおにぎりを担当したんですって。そしたら、カッチャンも大きな顔をして、「これ、お母さん作ったんやで」っていうふうなことを言う。

私たちは知らないうちにバリアーを張ってしまって、その人が本当はいろんな思いで苦しんでいることを知らずに、いいことをしているような気になっていることって、すごく多いんですよ。だから私は、絵本の世界を見えない子も知ってほしいと思っております。見えないっていうことは、輪郭がないんですね。だから、ずっとさわるから、後ろまで見えちゃうんです。光というのは直進ですから、必ず輪郭ができるんですよ。絵本の絵ってというのは、その輪郭から出来上がっているわけです。

昔、福来さんが、朔像（粘土細工）をですね。見えない子に像を作らせて展示会をなさったときに、未熟児網膜症の子の母の会のお母さんと一緒に行ったんですね。で、『母』という作品があったんです。その『母』っていう作品が、板の上に丸い球が二つ置いてあったんですね。彼女はそれを見て泣いたんです。それが芸術性だっというふうに評価してくださるのは、それはそうなんかもしれないけど、私は、この子はお母さんの体をこういうふうにしかな表現できないってというのは、その子が知らんからやと。描き方を知らんからやっというふうに言って、泣いてたんですよ。

できたら、見えない人に、見える世界の絵本の書き方みたいなのも分かってもらえたらいいなっていうのも、私の気持ちの中にあります。だから、さわる絵本は、ぬいぐるみのようなものを薄くして貼り付けてるんですよ。市販の絵本の絵を、できるだけそのまま。そして、素材をできるだけ描かれてるものに近い、ゾウだったらゾウ、クマだったらクマ、そういうもので作って、薄くして貼り付けてるんですよ。ちょっとさわる絵本を見てもらいましょうかね。

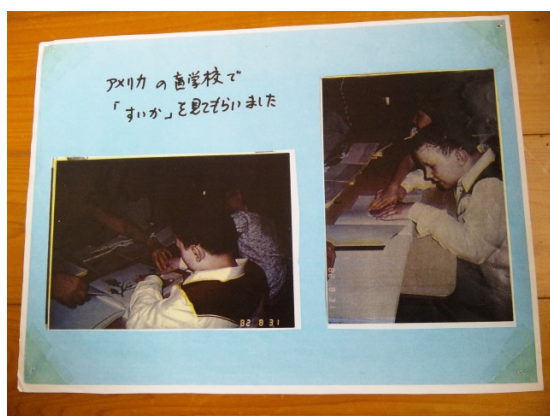


これは、『じゃあじゃあびりびり』の1ページ目ですね。車。こういうふうなのは描いてあるだけでは分かりませんが、このさわる絵本にするときは、中に描かれてあるものが、こういうふうにかけて触れるようにしています。そして、このままで分かるってということは、絶対無理だというふうに私は思っています。さわる絵本というのは、説明をしたと一緒に楽しむことができるという本だっているというふうに思っています。車は、ほら、ここ回るねんよと言って動かしてみせる。これ、本当もうちょっとうまいこと回る。こっちのほうぐるぐる回る。こんなふうに回るんだよっていう。そして、車はこんなふうに上がまあるくなって、これ、外国の車かなとかって言いながらこうすると、車ずっとさわってたって、もしそのまま描こうとしたら描けませんよね。でも、このさわる絵本をさわっていると、輪郭があるってということが、いつの間にか見えない子にも分かってきてくれるように思います。3歳の女の子が、私たちつみきの先生みたいになってくれた、ケイコちゃんっていうのがいるんですけど、その子が、レーズライターって書いて書いたら浮き上がってくる見えない人が使うものに、犬の走ってる絵とか、ライオンの走ってる横姿を描くことができるようになっております。

それから、さわる絵本っていうのは、絵本を普通に楽しむだけではなくて、見えない人が、見える人がどんなふうに絵を描くのかっていうようなことを、知らず知らずのうちに、体得してくれるんじゃないかなっていうふうにも思っております。この、今見せました『じゃあじゃあびりびり』は、大阪市のブックスタートで配っている本です。だから、もしお母さんが見えなかったり、お子さんが見えにくかったりすると、この本をお届けするってということになります。

さわる絵本の、今までいただいた感想を、あまり時間がないので、ちょっとだけ聞いていただこうと思います。この『すいか』は、もともと白黒でできている絵本なんですね。古い絵本で。この本を、きょうなぜお持ちしたかといいますと、一番最初にさわる絵本を作って、いろんな大人にも、外国にも持って見ていただいた絵本だけ

ら、きょうはご紹介しようと思って持ってきたんですけども。これを最初に見た大人の方が、ページをめくっていくごとに、花が咲いて、その花が小さい実になって、それから、少し大きくなって、こんなに大きくなったんですね。このときに大きな大人の方が、両手ですいかをさわって、「おお」、「おお」、「おお」って。「こんなに大きくなるのかあ」とか言って。本当に楽しまれたんですね。それで、やっぱり大人の人も同じように楽しめるんだなあっていうことを、まず、このときに思いました。白黒ではないから、本当は平山さんには悪いんですけども、これをこの間、大阪市の中央図書館で読み聞かせ会のときに置いてて、見た子どもが、その子は晴眼者だったんですけども、実際にすいか畑に行って、「本当に黄色い花やったわ」って言ってくれたんですね。だから、そんなふうにさわる絵本は、何らかのちょっとしたインパクトを子どもにも与えることができるなあっていうふうにも思いますし、それからもう一つ、この本は。



見えますかしら。これは、IFLA 大会がカナダのモントリオールであったときに、私が、アメリカの盲学校のほうに連れていってもらって、このさわる絵本を、盲学校の授業中に先生にお見せしたんですね。そしたら、すぐに子どもたちに見せてくださって。理科の授業だからちょうどいいということで、この男の子が、さわる絵本を使ってすいかのことを勉強してくれたので、「写真撮っていいですか」と言ったら、「OK」って言ってもらって、その後ずっと、こういうふうに皆さんにもご紹介してるんですけど、とってもうれしそうな顔をして。本当に、男の人が「ほう」、「ほう」と言ったように、同じように楽しんでくれているというのが分かりました。その後、アメリカのプリンティングハウスに行きまして、さわる絵本を寄贈しましたら、アジアの女性はこういうふうなものを作るとか言ってとても喜んでいただいて。それから毎年、向こうで出る本のリストなんかも送ってくださるんですが、アメリカとかカナダにはやっぱり、こんな布を使ったものはほとんどないようですね。で。



これは、アメリカの図書館にさわる絵本を寄贈したときに、日本の本が新しい家を見つけたよって、地域の新聞に出たんですけども。これはブルーナさんの本なんですけれども、さわる絵本と現物の本を前に置いて、こんなのが新聞に掲載される。やはり世界中で、こんなさわる絵本っていうのは他にはないんですね。押し絵のようにしたものは少しありますけれども、私のこの40年の経験からいいますと、少しふわっとしているもののほうが、子どもたちにとって楽しいようです。いろんな絵本ありますけれども、素材を軟らかいもの、ふわふわしたものにすると、知的な障害のある子どもでも、自分の頬に寄せたり。これも実話なんですけれども、私が大事に、うさぎ用にとってあるきれいなピンクの布があったんですね。それを『いち・に・さん』の丸にして、絵本にしちゃったんですよ、私の仲間がね。それを私が、「ああ！あんなんに使うて」って泣いてたら、その人が、その次に来たときに、「それを持っていったら、今まで絵本やいうても見向きもしてくれなかった子が、それを頬に押し当てて、いち、にって遊んでくれたよ」って。「小西さんにはあんなに言われたけど、この本は作って良かった」っていうふうに、私は随分叱られたんですけども。そんなふうに、つるつるのもの、へこんだもので、いろんな形を作った本もありますけれども、なぜか軟らかい布で作ったものが、子どもたちの心によく届くような気がしますね。

それから、さわる絵本とてんやく絵本、布の絵本の違いを言いますと。さわる絵本っていうと、東京の方は皆さんよくご存じで、今、私が紹介してるように、見えない子のための本やっていうふうなことも分かっていたらいるようなんですけれども、布の絵本と混同される方がとても多いんですね。それで必ず、布の絵本と、さわる絵本と、てんやく絵本の違いを、いつも一応はご紹介してますので、ここでやってみようと思います。今お見せしてたのが、さわる絵本です。見えない子と見えない親のための絵本です。特に、赤ちゃんのときから使ってた

さいというふうに言ってます。

これはてんやく絵本です。市販の絵本の墨字の部分を、点字を付けてます。昔はこのまましてたんですけども、岩田さんは、今は。文字を点字にするだけでなくって、この場面を説明する文も点字で付けているのと、絵の主人公とかは、こんなふうにしールを貼って、どこに主人公がいるか分かるような形で絵本を作っておられます（透明シートは、最初の岩田さんへの定期便の時にも、絵がどこにあるか分かる程度は貼っていました）。てんやく絵本も全国に無料で貸し出しができますので、もし、見えるお子さんをお持ちのお母さんが、子どもさんが小さいときは説明する必要がありますので、さわる絵本を使ってほしいんですけども、ちょっと大きくなって、子どもが絵を読めるようになると、てんやく絵本をお使いになったら、もっと絵本の世界が広がると思います。

それから、布の絵本っていうのは、これはもともと、布で、見える子ですね。見えるけれども、その他の障害がある子のためって作られた、今回も展示されておりますけれども、ふきのとう文庫に代表されるような布でできた絵本。それらの本は、手のリハビリに役立ったり、あるいは、ベッドの上で見ても楽しめるっていうようなものになってます。私が香川の県立盲学校に行ったときに、この絵本を使ったんですけども、やはりこの頃は重複の障害の子が多くて、なかなか初めから、紙のさわる絵本を楽しめる、一緒に見るなんていうことができない子が多くっております。そんな子には、こういうふうな布の絵本を最初に導入に使って。



こんなふうに通じるっていうのも、とても子どもたちの注意を引いて、仲良くなる手段の一つとして使えますので、こういうふうな布の絵本も、さわる絵本と同じように、障害のある子にとって、その子にふさわしいものに合わせさせてあげるとい意味では、とても重要です。が、もともとは、ベッドの子とか、あるいは肢体不

由の子とか、知的な障害のある子、目が見えるけれども障害のある子のために作られたのが、布の絵本っていうふうに覚えておいてほしいと思います。あと、時間が少なくなりましたが、私がさわる絵本を使ってもらった方の中で、いろいろ感想をもらっておりますので、それを紹介したいなと思います。市立の盲学校にも、府立の盲学校にも、絵本の会をよくしておりますので、20何年間もしておりますけれども、なかなか写真などを撮らせていただくことがないんですけれども、ちょっと古いですが、少し、さわる絵本を見てくれている状態をご紹介したいと思います。これは、もう随分昔ですが、市立の視覚支援学校で読み聞かせ会をしている状況です。こんなふうに横に座って、ボランティアと一緒にさわりながら読むというのが形です。



これは徳島の県立盲学校なんですけれども、私が中学生の女の子と一緒に読んでるんですけれども、このときに経験したことなんですけれども、彼女、これはうつむいてますけれども、このときには私にも笑ってくれて。ネコがこのさわる絵本の中に出てくるんですけれども、「お姉ちゃんがかわいがってるネコがいてるねん」って言って。「私はあんまりさわらしてもらわれへんねんけど」とかって言って、お姉ちゃんはこのまんがが好きや、あんなが好きっていうことを、私にいろいろ言ってくれたんですね、さわる絵本をさわりながら。そしたら、この隣に立ってる方は、これ、校長先生なんですけれども、「あんたいっつも、感想文書けって言うても書けへんのに、きょうはよう話してくれるね」って。「あんまりそういうふうなこと言ってくれないのに、さわる絵本っていうのはすごいね」っていうふうに言っていたことがあります。この上の子が見ているのが、さっき、モーって言った布の絵本です。

絵はありませんけれども、私がさわる絵本に込めた願いをそのとおりに体現し、感想文として書いてくれているのがありますので、2、3読んでみたいと思います。まず一番初めに、これはさっき、大阪市のブックスタートで本をもらって、それから私のほうから、大阪市の図書館から貸し出しをずっとしていった方の感想なんです

けれども。「まず、絵本が着いたら、開けて、開けてと騒いでいます。まず、本の入れ物が覚えているようです。子ども一人で見せると、結構わやして、壊してしまうので目が離せませんが、(以前に壊したことありました。)で、読んでって言われても、点字がすぐ読めんで、絵がイメージできたらそれだけで話せていいです」って。彼女はとても点字を読むのが下手なんです。電話でも話しましたが、「一番は、子どもに絵の説明がしてやれるのがうれしいです。うさぎの耳は長いんよとか、子どもにも分かりやすいようです」と。「手ざわりもそれぞれに違って、イメージが湧きます。手が動いたり、服を着ていたり、細かいところまで作られていて、見えなくても楽しめます。点字が苦手な私でも、絵のほうだけで楽しめます。子どもと一緒に遊べる絵本です。」で、『もじゃもじゃ』の絵本はどうだった?って聞いたら、「さわるだけでは分かりにくいものもあったけど、読んだら納得でした」って。「初めと後の違いが分かって楽しかったです」って。「るるちゃんの髪はよう分からなかったです」って書かれてしまってます。それから、『どうぶつあいうえお』ってというような絵本があるんですが。「このシリーズは、毎回、毎回それぞれが違っていいです。ナメクジはリアルでした。おかげで娘も理解できたようです。説明してやれるんでうれしいです」って。

お母さんに絵本を読んで、読んでって、赤ちゃんのときからは言います。そして、これ何? これ何?って聞きます。そのときに、見えないお母さんは説明してやれないですね。子どもは見えるから、お母さんも当然見えてると思ってるみたいで。そのうちに、お母さんから返事がないと、もう読んでって言わなくなってしまうんですよね。だから、この説明ができるっていうことが、とても私にとっては、思ったように使ってくださってると思って、とてもうれしいです。

で、「今回も楽しく見せてもらいました。今は私が読むより、コト(コトちゃんっていう)はお姉ちゃんになりまして、3歳になったんですけど、コトのほうがよっぽど上手です。(ユアっていうのが、生まれたての1歳ぐらいの子です。)ユアもすいかが変わっていくのに、ひゃあひゃあ言いながら見てました。葉っぱを取らないかとひやひやしましたけど、と書いてあります。『ゆうたとさんぽする』っていう本ですね。「ゆうたの服が増えていくのが分かりやすくて楽しかったです。散歩のときのうんち袋には笑ってしまいました。娘も「パンツはいた」とか言いながら、楽しく見てました。」

こんなふうにお母さんが子育てに、見えないから私は絵本が読んでやれないんやっていう、そういうふうな

ことがなくなるってということが一つの私の願いでもありましたので、こんなふうに使っていただいて、とてもよかったですねとおもっております。

それから。これは東北のほうからインターネットで申し込みがあって、どうもその子は、見えてないのに見えてるふうをして友達と接しているっていうように思うので、さわる絵本というのを知ったので、一遍貸してくださいということ。宮城県ですね。保育園の先生から言って来られたんです。それで本をお送りしましたら、利用しての様子。『じゃあじゃあびりびり』とか、『いないいないばあ』、『でてこいでてこい』を送ったんですけど。『初めはすごく興味を持ち、「これは?」、「これは?」とすごく質問攻めでしたが、理解してくると、お友達に対して、これは何なんだよ、ほうら何々してると、目に見えているかのように、さわるたびに笑いながら説明していました。特に、『じゃあじゃあびりびり』と『いないいないばあ』がお気に入りでした。そして、お手てを動かして、「いないいないばあ」と言いながら触れ、ネズミの場面では、その場面をみんなに説明するくらいお気に入りでした。『じゃあじゃあびりびり』の水道の場面では、「水出せばなしは駄目だよ」とか、踏切の場面では、「かんかんかん、電車が来ます」など、車の場面では、「車の中に人が乗ってるよ」なんて言ったりするそうです。『でてこいでてこい』では、みんなと当てっこを楽しんでました』っていうふうに、先生が感想を書いてきてくれました。

もう一つ、ぜひご紹介したいのがあったのですが、どこかへ消えてしま、あ、出てきました。『先日、さわる絵本を送っていただき、ありがとうございます。息子は5歳ですが、本は大好きなのでとても喜んでおりました。また、7歳の姉と2歳の妹たちとも、仲良く本を広げて見ていました。最近、妹に、「兄ちゃん、本読んで」と頼まれることが多いのですが、「ごめんね。兄ちゃん、本読んであげられへんねん」と悲しそうに断っていました。でも、さわる絵本なら読んであげられるので、張りきって読んであげていました。また楽しみにしていますので、これからもよろしく願います』。そうなんですよ。見えないっていうことは、してもらえばいいんですよ。それが当たり前みたいに今まで思っていましたけれども、そうじゃないんですよ。できることいっぱいあるんです。それが、さわる絵本の、こんなふうに使っていただけたというのが、とても私はうれしいと思います。

これは、香川県立の盲学校にキャラバンに行きました後、定期的に絵本を貸し出ししているそのお礼状なんで

すけれども、『幼稚部の5歳児さんが、最近、絵本に興味が出てきて、毎日絵本を手にとって、お話を楽しんでいます。いろんな絵本を通じて、楽しみを広げていってほしいなと思っています』。これは先生からのお手紙なんです。で、十三の保育所でもそうですね。どうも見えてないので、ちょっと借りたいということでお貸ししたんですけど、『保育所で子どもたちに読み聞かせをしましたところ、皆、初めて見るさわる絵本に、ぱっと表情が変わり興味津々でした。障害を持つ弱視の子は、絵本に手で触れながら、特に、コケッコーとニワトリの鳴き声のところ、ニワトリの絵を何度も触れて、感触を確かめていました。淀川図書館の方にも連絡を入れておいてくださり、淀川図書館のほうでも登録を済ませ、数冊さわる絵本をお借りすることができました』。こんなふうに、図書館に本があると後々のケアができますので、どこの図書館にもさわる絵本を置いてほしいなと思っております。

もう時間が来ました。私、最後に特に言いたいことは何かというと。子どもは絵本が好きですよ。いつでもどこでも、本を読んでもらうっていうことが。たとえどんな障害があっても、知的な障害であれ、体が不自由であれ、そういうふうな障害があっても、赤ちゃん生まれてから5歳ぐらいの間は、できるだけ絵本を読んでもらって、また、絵本に触れるだけじゃなくって、絵本を読んでもくれる人に触れて育ってほしいと思っています。そのためには、1冊でも多くのさわる絵本と、それを届けてくれる人が必要だと思います。だから、皆さんがたも、きょうお聞きいただいて、面白そうやなと思ったら、ぜひ、さわる絵本を作るお仲間になっていただき、あるいは、さわる絵本を作るっていうことができなかったとしても、絵本を読む仲間になっていただいて、病院にいてる子とか、施設にいてる子とか、子ども相談所に、一時保護されている子とか、そんな子たちが、自分のことを愛してくれて、大きくなるのを一緒に見てくれる人がいるっていうことを、それとなく絵本を通して感じてもらえるような世の中になってほしいと思いますので、そんなふうな人になっていただけたらありがたいなと思います。地域のボランティアさんと一緒に活動していただきたら、とてもうれしいなと思います。

なんかとりとめもない話になってしまいましたけれども、一応3時10分ぐらい前には追われということでしたので、あと10分もありませんけれども、何かきょう話しましたことでご質問等がありましたら、お受けいたしますので。ありがとうございました。